

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

幼い頃、私にとっての世界は、自分の住んでいる小さな町にかぎられていた。その町には山と川があり、川原があつた。家があり、塀があり、雑草のはびこる空き地があつた。山と川のあいだには、たんぼ田圃があり畑があつた。橋を渡った町のはずれには学校があり、そこに毎日かよっていた。

橋の欄干らんかんから身を乗りだして川の流れを見てみると、橋のほうが動いてゆくように思えた。小学校の低学年の子供にとって、世界は自明であると同時に、驚きに満ちていた。大人たちの会話の破片が、この世界にときに異様な照明をあたえた。ほとんど稲妻のように。だが、それは世界の一部を明らかにすると同時に、さらに暗くもした。闇の部分を増やしもしたのである。

夜、寝入ろうとしている子どもたちの耳に、大人たちの世界から声が聞こえてくる。それはかすかな話し声であつたり、異次元からの声とでもいうほかないラジオのアナウンスの声だったりする。これらの言葉は子どもの世界をさらに混乱させた。

そこで語られるさまざまな人名や地名が、何か異様に、雲か霞のように遠くへと伸びている世界というものを感じさせるのだが、むろんその端は闇に消えていてつかむことができない。そしてそ

のさらに向こうには、心身ともに萎なえてしまいそうな光り輝く死が潜んでいるのである。

跨線橋こせんきょうは鉄道会社が利用者へのサーヴィスとして作ったのだと長く思っていた。と、太宰治がどこかに書いている。子どもにとって跨線橋を渡ることは楽しみのひとつなのだ。いつもとはまったく違う眺望を得ることができるからだ。その楽しみみの体験から世界の全体を類推してゆくほかない。それが子どもの世界なのである。

太宰治の幼年時代の記憶は特殊なものではない。川も橋も、その橋の下も、危険と魅惑に満ちていて、子どもたちは、その危険と魅惑から世界を構成してゆくほかないのである。

学校にしてもそうだ。先生も生徒も、はじめ、どこからともなく現われるのである。大人たちや子供たちのあいだにこだまするさまざまな声が、その先生や生徒がどのような世界にどのようなつながっているかを暗示する。だが、ただ暗示するだけなのだ。知識のあいまを埋めてゆくのは、放恣しというほかない想像力だった。世界はいびつに形をなしていった。

たとえば「蛍の光」という唱歌がある。毎年、卒業式に歌われるわけだが、その歌詞は小学校の一年生や二年生に理解できるようなものではない。私はいつも、「いつしか年も、すぎのとを」という一行になると、塔のようにそびえる巨大な杉の木を思い浮かべていた。そして、上級生の卒業と杉の塔とのあいだにどのような関連があるのか、ひそかに思いをめぐらしていたのである。

私だけではない。たとえば蓮實重彦は、「あけてぞ、けさは、わかれゆく」という一行に、「ゾケサ」なる奇怪な動物の行進してゆくさまを思い浮かべていたのだという。『反∥日本語論』の一節を引く。

『蛍の光』の最後の一行に含まれる強意の助詞「ぞ」の用法を理解しえなかった少年は、なぜか佐渡のような島の顔をした「ゾケサ」という植物めいた動物が、何頭も何頭も、朝日に向かってぞろぞろと二手に別れて遠ざかってゆく光景を、卒業式の妙に湿った雰囲気の中で想像せずにはいられないのだ。ゾケサたちは、たぶん彼ら自身も知らない深い理由に衝き動かされて、黙々と親しい仲間を捨てて別の世界へと旅立ってゆくのだろう。生きてゆくということとは、ことによると、こうした理不尽な別れを寡黙に耐えることなのだろうか、可哀

そんなゾケサたちよ。

「佐渡のような島の顔」をしているというのと、わりわけ傑作である。声をあげて笑ってしまうのは、自分も似たような体験をしているからだ。おそらく誰もが同じ体験をしているのである。

たかが歌の歌詞にすぎないなどといってはならない。他のさまざまなことにしても、世界は同じようなかたちで理解されてゆくのである。親族についても、学校についても、町についても、そして自分自身の身体についてもさえも、まずおろかな思い込みこそが子どもの頭脳を占拠するといっている。そしてその世界像は子どもの秘かな欲望と深く関係しているのである。

子どもが世界を理解してゆくその仕方は多様で、ときには思いもよらないかたちで展開する。ほとんど子どもの数だけ世界があるといっているわけだが、そのひとつひとつが独特なかたちに歪んでいるのである。不気味というほかない。

あるときは暗いジグソー・パズルのように、またあるときは一挙に展望が開けるように、子どもは思い思いに世界を理解してゆく。大人の世界へと接近してゆく。そのひとつこまひとつこまを眺めるならば、ときにはおぞましいほどの世界像が浮かんでくる。

たとえばある日、まるで霧が晴れるように、何もかもわかったと思えるときがきたりもする。それまではばらばらだった一日一日が不意に連続として理解され、その連続の中で、世界が何を意味し、そして人間がその中でどのような位置にあるか、何もかもがわかったと思える瞬間がきたりもする。

いや、より正確に言えば、世界が何も意味しはしないこと、人間もまたそこで、どのような意味ももたないことがわかってしまったと思える瞬間がきたりもするのだ。こうして、大人への侮蔑が湧きだしたりもする。

十三歳で登は、自分が天才であること（これは仲間うちみんなの確信だった）、世界はいくつかの単純な記号と決定で出来上がっていること、人間が生まれるときから、死がしつかりと根を張っていて、われわれはそれに水をやって育てるほかに術を知らぬこと、生殖は虚構であり、従って、社会も虚構であること、父親や教師は、父親や教師であるということだけで大罪を犯していること、などを確信していた。だから彼が八歳のときに父親が死んだのは、むしろ喜ばしい出来事であり、誇るべき事件だった。

三島由紀夫の『午後の曳航』^{えいこう}の一節である。作りものめいた小説だからといってリアリティがないわけではない。むしろ逆に、リアリティのなさにこそ三島由紀夫のリアリティを見るべきだろう。

この悪意に満ちた世界像はまさに十三歳のそれだが、しかし、大人はこの世界像を否定しきるだけの論理を持ってはいない。そこに付け入るといったかたちでしか世界に関われなかったところに、この作家の悲劇があったというべきかもしれない。が、重要なのは、ここに描かれた登という少年の姿は少しも特殊なものではないということだ。

子どもは、表面的な煌めき^{ひかり}に心を奪われながらも、あいまいな靄^{やも}のような世界なかへと踏みこんでゆく。そしてそのあいまいな靄のしくみを不意に理解するのである。

だが、その理解の仕方はけっして一様ではない。驚くほどに多様だ。歪んだ欲望、打ち消された欲望をはらんで、ときに過激であり、ときに絶望的である。登の理解はそのひとつの、ある意味ではありふれた例にすぎない。

登たちは都市のなかに隠れ家めいたものを見出だし、そこで儀式めいたことをする。認識は実践によって示されなければならない。蛙を解剖し、猫を叩きつぶし、ついには登の義父を毒殺する。

理論はどのようにでも組み立てうる。だがそれを生きたもの、現実のものにするには、心身を突き刺す痛みを必要とするのである。そうしなければ、人はそれが何であるか実感できないのだ。

^A『午後の曳航』は、ある意味で後味の悪い小説だが、それは作家の悪意によるというよりも、子どもたちの悪意、いや妄想による。

(引用先 三浦雅士『身体の零度』
2002年 同志社大学)

問 傍線——Aについて「子どもたちの悪意、いや妄想」が、どのような点から『午後の曳航』を「後味の悪い小説」にしていると筆者は考えているのか。次のうちから適当ではないものを一つ選び、その番号を記せ。

1 登が、自分の理解しようとした世界が、実は、何も意味しないことを十分わかっていたこと。

2 登が、大人の世界像を理解しようとせず、大人の世界に対する侮蔑の念をあらわにしていたこと。

3 登が、悪意に満ちた世界像を現実のものとして受けとめるために、ひそかな隠れ家を必要としたこと。

4 登が、あいまいな靄のような世界を理解するために、心身を突き刺す痛みを不可欠としたこと。

5 登が、他者の身体を傷つける快感によって、不意に自分と世界を実感できるようになったこと。